



第21回八方窯窯出し (2013年5月11日)



八方窯焼成中 (2013年5月)

続・増穂薪窯通信

てんやわんや

文・写真 増穂登り窯太田治孝



八方窯の煙突 (2013年5月)

5日目の5月3日、正面の焚き口と左右2ヶ所ずつ、合計5ヶ所の焚成が始まります。煙突の高さが6mあり、引きは充分なのですが、2ヶ所の焚き口が開放されると炎が大

ほとんどは、素焼きしてありません。釉薬などの施しは一部だけ、ほとんどが焼締となります。当然のことながら、ヒビや爆発は避けなければいけません。4月29日午前に入火をいたしました。正面から小割りの割木によりチヨロチヨロと焚き始めです。け

つして、大きな火となつてはいけません。本室には天井中央に1本温度計がセットされています。4月29日～5月1日までの3日間、200度で焙ります。29日は50度から100度、30日は100度から150度、5月1日ですと200度です。炎が室内をグルグルと回り、窯内を平均して200度に昇温するのはなかなか難しいものです。焚き口は大きく開いています。白黒い煙が全面から吹き出します。3日間、約2時間間隔に薪を投入します。昼も夜も続けます。深夜になると、なかなか予定どおりにはいきませんが、仕方ありません。火入れから4日目の5月2日の朝、本室が300度、火袋が200度です。ここからが本番の窯焚きです。正面を耐火レンガで閉め、30cm四方の焚き口を造ります。

きく吹き出します。薪投入のタイミングは3人の焚き手のコントロールが重要となります。これが上手いかないと昇温しません。6日目の5月4日には1200度以上となります。7日目には1200～1250度でキープしたかったのですが、温度のコントロールが難しくなり、1300度まで昇温してしまいました。薪投入をストップすれば、温度は下がるのですが、還元状態で下げるのにはテクニックを必要とします。7日目の5月5日の夕方、なんとか焼成は終了しました。間伐材の薪、約7トンを使用しました。そして1週間後に窯出し、SK32の耐火レンガが融けるハブニングがあり、棚板が崩れ作品が落ちる寸前でストップ、なんとか助かりました。今年は大作の焼成が多く、9月中旬に22回目の八方窯焼成の予定です。

富士山世界文化遺産登録記念
陶山水展
池田満寿夫の陶板黄金の富士とオーガニック野菜の皿夕展
■2013年8/20～9/1
10時～17時
入場無料・会期中無休
■増穂登り窯オープンテラス周辺
(コーヒー、ティーサービス、オーガニック野菜販売)
■主催/増穂登り窯
共催/ますほ里山暮らしを学ぶ会
■増穂登り窯
山梨県南巨摩郡富士川町平林 2144-4
TEL 0556-22-8941
FAX 0556-22-8942



1993年6月八方窯築窯中に出た“つるし雲”

第3回
八方窯焼成報告

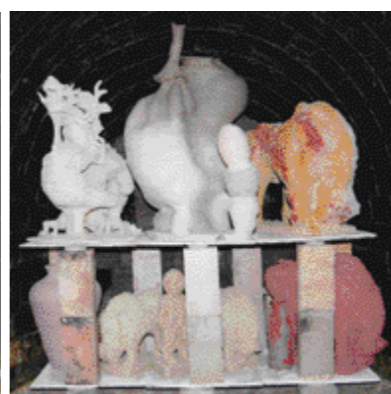
八方窯の正式名称は「満寿夫八方窯」です。1993年6月、芸術家・池田満寿夫は自ら考案した薪窯を築窯しました。

それまでは、登り窯とか穴窯で陶芸作品を焼成していましたが、火前・火裏が作品の窯詰め位置により決定されることを好まず、作品に四方八方から炎があたり、全面を火前にするという陶芸薪窯焼成の常識を覆す窯が八方窯です。窯の内部の高さは180cm、入口幅120cm、奥行320cm。この本室と6mの煙突の間に約1mの火袋(作品焼成可能)と続きます。この八方窯で焼成した池田満寿夫の代表的な作品は、般若心経シリーズの大仏塔と仏塔です。これらの作品は、三重県にあるパラミタミュージアムに常設されているのでご覧になられた方も多いと思います。1m以上の大仏塔は、八方窯の周辺のスペースで約2ヶ月かけて制作・乾燥し、2日間かけて窯詰めをした後、焼成しました。池田氏が他界して17年、今年が21回目の八方窯焼成となりました。20cm以内の小作品のほとんどは火袋に窯詰めします。

「陶芸家・吉川充氏によるタタラ制作ワークショップ」参加者の作品など、20～30cmから1m位までの作品を窯詰めしました。作品は乾燥に1ヶ月以上を必要とする大作が多く、窯詰めには4月25日～28日まで、4日間を必要としました。棚板は最大で60×60cmのサイズから40×45cmのまで約50枚、支柱にはSK32の耐火レンガを使用しました。八方窯はその名の通り、焚き口は正面に1ヶ所、左右に各2ヶ所、合計5ヶ所から薪を同時に投入する窯です。窯詰めした作品の



「龍」の棚板の支柱 SK32 が融けてしまう



八方窯の最奥に窯詰め。ベンガラ、鬼板が着色